

名大病院の活動を広く院内外にお知らせするため、『名大病院かわらばん』を発行しています。
『名大病院かわらばん』の一面では、名大病院が行っている様々な活動を取りあげ、それに取り組む職員の話
掲載しています。過去に掲載した記事の中から一部をご紹介します。

小児循環器センター稼働

小児心疾患のトップセンターを目指して

名大病院は2016年より小児医療センターの確立を目指し、小児医療に重点を置いてきました。少子化が進む中で、20年、30年先も高度な医療を地域へ継続して提供するために、専門性の高い医療技術や施設設備を集約させた拠点づくりを進めています。その一環として、2023年「小児循環器センター」を起ち上げました。10名ほどの専門職を中心に、各プロジェクトチームで手術室の運用や外来の設置、心臓カテーテル検査室や小児集中治療室の新設などに取り組み、年度ごとに年齢別・難易度別に目標を立て、実績を評価しながら、安全に着実に高度化を図っています。現在は心室中隔欠損症などの軽症例、成人先天性心疾患の治療から始めていますが、最終的には新生児の重症例にも対応できる全国屈指のトップセンターを目指しています。

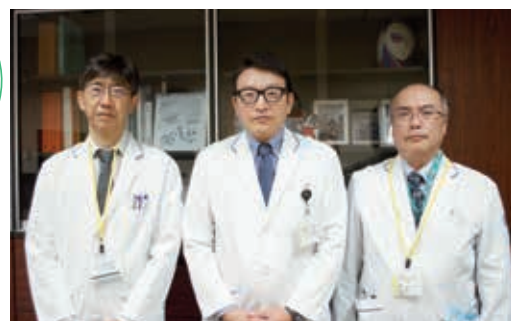
名大病院だからこそ治療が完結できる

先天性心疾患の子どもは、およそ100人に1人。重症心疾患では、25年前はそのうち8割が亡くなっていましたが、今は適切な手術を行えば9割が助かるようになりました。ただ、先天性心疾患には多数の種類があり、発症頻度も1%以下の重症例がいくつもあります。高い治療レベルを維持するには、医師が経験を重ねて知識や技術を共有することが重要で、今後、少子化が進めば医師の経験不足、治療技術の低下が起きるのではないかと危惧されています。当院は大学病院として人材育成を使命としており、多くの症例が集まる当センターで医師のレベ



先天性心疾患医療の専門医を中心に名大病院ならではの高度な治療提供を目指す

全国
トップレベルの
治療提供を
目指して



大橋病院准教授、六鹿教授(センター長)、櫻井病院教授

ルを高めていきたいと考えています。加えて、先天性心疾患は成長に伴う変化を見ていくことも大切です。現在、日本では年間1万件ほどの先天性心疾患患者が成人しており、必要に応じて再手術が行われています。成人の受け入れはもちろん、最終的な手段となる心移植の実績も豊富で、一つの病院内で治療を完結できるのは、総合病院である当院の強みと言えるでしょう。

すべての小児患者を受け入れられる拠点へ

当センターは今後、すべての小児患者さんを受け入れられる全国トップレベルの拠点を目指すと同時に、当院が掲げる他分野も含めた小児医療センターの構築に向けて、その一翼を担うことができると考えています。現在の課題としては先天性心疾患患者の成人後に、妊娠・出産を支援する産婦人科医が全国的に少ないことが挙げられます。当センターの活動の幅を広げて、将来は愛知県でも安心して出産ができる環境を整えられればと思っています。小児心疾患の領域はニッチですが、治療が必要な方は確実にいます。今後進んでいく少子化の中で子どもの命を守ることは非常に重要で、当センターの活動は社会的な使命を担っていると信じています。

(『名大病院かわらばん』131号 2024年1月)

小児循環器センターでは手術が必要な患者さんのための 小児循環器外来を開設しています。

●小児心臓外科(水曜午後) ●小児循環器内科(木曜午後)
受診に関心のある方は、まずはかかりつけ医にご相談ください。

名大病院
NEWS

かわら
ばん

『名大病院かわらばん』は、当院における積極的な取組事項等を中心に掲載した季刊誌です。

名大病院ホームページでもご覧いただけます。

ホームページアドレス

<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/outline/publish/>

バックナンバーや災害医療支援活動の状況、医事統計なども公開しています。



肺移植実施施設に認定—肺移植外来を開設—

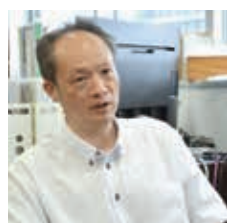


救える命を救うために最善の医療を

肺移植は他に有効な治療法がない慢性呼吸不全患者にとって、最後の救命手段となりえる治療法です。現在、日本で行われる肺移植手術は年間120例ほど。移植医療への理解が進み、年々、患者は増加していますが、国内にはそれに対応できる肺移植実施施設や移植手術ができる医師の数は少ない状況です。

当院では、地元のかかりつけ医として肺移植患者の術前・術後管理を行ってきましたが、2019年の着任以降、肺移植実施施設でないにもかかわらず、肺移植適応患者の評価のための診察が増え、適応すると判断した場合には関西の移植実施施設を紹介してきました。常に肺移植患者さんを診療する状況の中で、「院内で肺移植医療を完結できれば、命を救える可能性は広がる」との想いから、肺移植実施施設認定に向け、動きはじめました。

病院一丸で準備を進め、高評価を得て肺移植実施施設に認定



芳川豊史教授

2021年に肺移植実施施設を目指してワーキンググループを設置。各科の医師や看護師、検査技師、放射線技師など多くの職員が参加し、国内最大の肺移植実施施設でも研修を受けるなど、着々と準備を進めました。

その結果、非常に高い評価を得て、

2023年3月に肺移植実施施設へ認定され、肺移植の適応評価から脳死肺移植登録、肺移植手術まで、肺移植に必要なプロセスを一貫して院内で行うことが可能となりました。

2023年8月には肺移植外来を開設。脳死肺移植適応評価から適応検討申請、日本臓器移植ネットワークへの待機登録も始まりました。現在はまず脳死肺移植から取り組み、平行して生体肺移植の準備も進めています。

肺移植医療をこの地に根づかせるために

欧米では既に肺移植は日常的な手術であり、日本でもいち早く世界標準の医療を提供する必要があります。それには若手医師の育成がかかせず、世界と渡り合える力量を養うために、当院では多くの人材が継続して国内外で肺移植のトレーニングを積んでいます。こうして得た高度な手技を還元し、肺移植医療をこの地に根づかせることが次の目標です。

当院は肝臓、心臓、小腸、血液、腎臓に関わる移植手術も行っており、それらの豊富な実績と他科の医師との連携体制も肺移植実施施設としての強みです。

今回の認定により、肺移植医療の全てを継ぎ目なく行えるようになりました。当院は今後も地域医療の最後の砦として、その責務を果たしていきたいと思っています。

(『名大病院かわら版』130号 2023年10月)

AYA 支援チーム始動

多様な悩みを抱える若年層を支援するために

AYA(アヤ)とは Adolescent & Young Adult の略で、15～39歳位の世代をさします。この世代は、小児に多いがんや成人に多いがんの両方にかかる可能性がある上、進学・就職・結婚・出産など多くのライフイベントが待ち受けています。治療だけでなく、学校や職場、恋愛や家族に関する悩みなど、多種多様な大きな課題に直面する人も少なくありません。そのため、個々の患者に合わせた周辺支援が必要とされるようになり、欧米では既に取り組みが進んでいます。日本においても、がん対策推進基本計画や、小児がん拠点病院およびがん診療連携拠点病院等の指定要件に AYA 世代への対応が盛り込まれました。

当院では、早くから AYA 支援の重要性に注目してきましたが、一部の科での個別の取り組みが中心で、不慣れな科では対応が不十分になる可能性がありました。そこで、病院全体の枠組みとして、ワンストップで AYA 世代を支援するチームを結成しました。

多職種でチームを組み、全科横断的に活動

AYA 支援チームは医師、看護師、医療ソーシャルワーカー(MSW)、チャイルドライフスペシャリスト(CLS)など多職種の有志から成り、各専門職が連携してきめ細かな支援を提供します。小児がん拠点病院に選定された2013年頃から培ってきた多職種連携支援の基盤を発展させ、支援チーム活動を行います。

まず AYA 世代のがん入院患者を対象に、スクリーニングシート

若い世代の
療養生活を
全方位から
支える



AYA支援チームのみなさん

を用いて療養の悩みなどを把握するシステムを構築し

ました。そこで問題があれば病棟で対応し、必要に応じて AYA 支援チームが介入します。支援チームは全科横断的に活動し、問題に対応できる部署につなぐハブとしての役割を担います。

AYA支援をリードし、療養生活でも選ばれる病院に

支援チームには、子どもに寄り添う CLS や社会復帰を助ける MSW、心の専門家である臨床心理士、妊孕性温存の相談に対応する産婦人科医も参加し、疾患以外の悩みを相談しやすい体制です。AYA 世代の患者が少ない科でも、支援チームを通じて問題対応のノウハウを各科と共有します。それによって、高度な医療だけでなく、療養生活でも「名大病院で良かった」と言ってもらえることを目指します。

患者サービスの一環として行われている AYA 支援ですが、その重要性が認識されつつあり、県内でも徐々に気運が高まってきました。当院は地域の拠点病院として AYA 支援でもリーダーシップを取り、活動を広めていきたいと考えています。

(『名大病院かわら版』129号 2023年6月)